

強力な細胞増殖阻害物質

弘大など 抗がん剤へ応用期待

慶応義塾大学と弘前大学などの研究グループは、沖縄県のサンゴ礁に生息する海洋シアノバクテリアから、抗がん剤への応用が期待される強力な細胞増殖阻害物質を発見した。がんの治療標的として注目されているタンパク質の働きを史上2番目の強さで抑えることができる物質で、化学合成にも成功。今後、抗がん剤開発への応用が期待される。

（西尾 瑛）

「ついで理論計算での確認などを行った弘大の橋本教授は「薬の開発のきっかけになるのでは。今回、研究に

貢献できて光栄」とコメントした。

沖縄・サンゴ礁生息の海洋生物から

両大学と、公益財団法人イオンポンプ(SERCA)がん研究所、東京大学定量的生命科学研究所による共同研究で、弘大からは農学生命科学部の橋本勝教授(60)が参加した。今回見つかった化学物質は「イエソシド」と名付けられた。イエソシドは、抗がん剤の標的として注目されているタンパク質である、小胞体上のカルシウム

イオンポンプ(SERCA)の働きを強力に抑える作用を持ち、その強さは史上2番目ながら、最も強力で既に前立腺がんの治療薬として開発が進められている「タプシガルギン」よりも化学構造がシンプルで、より低労力で合成でき、創薬研究に有利だという。天然物化学が専門で、今回イエソシドの立体構造に

上記の画像は、当該ページに限って”陸奥新報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。